

第3種郵便物認可

県内29社の協会 普段は害獣・害虫駆除がメイン

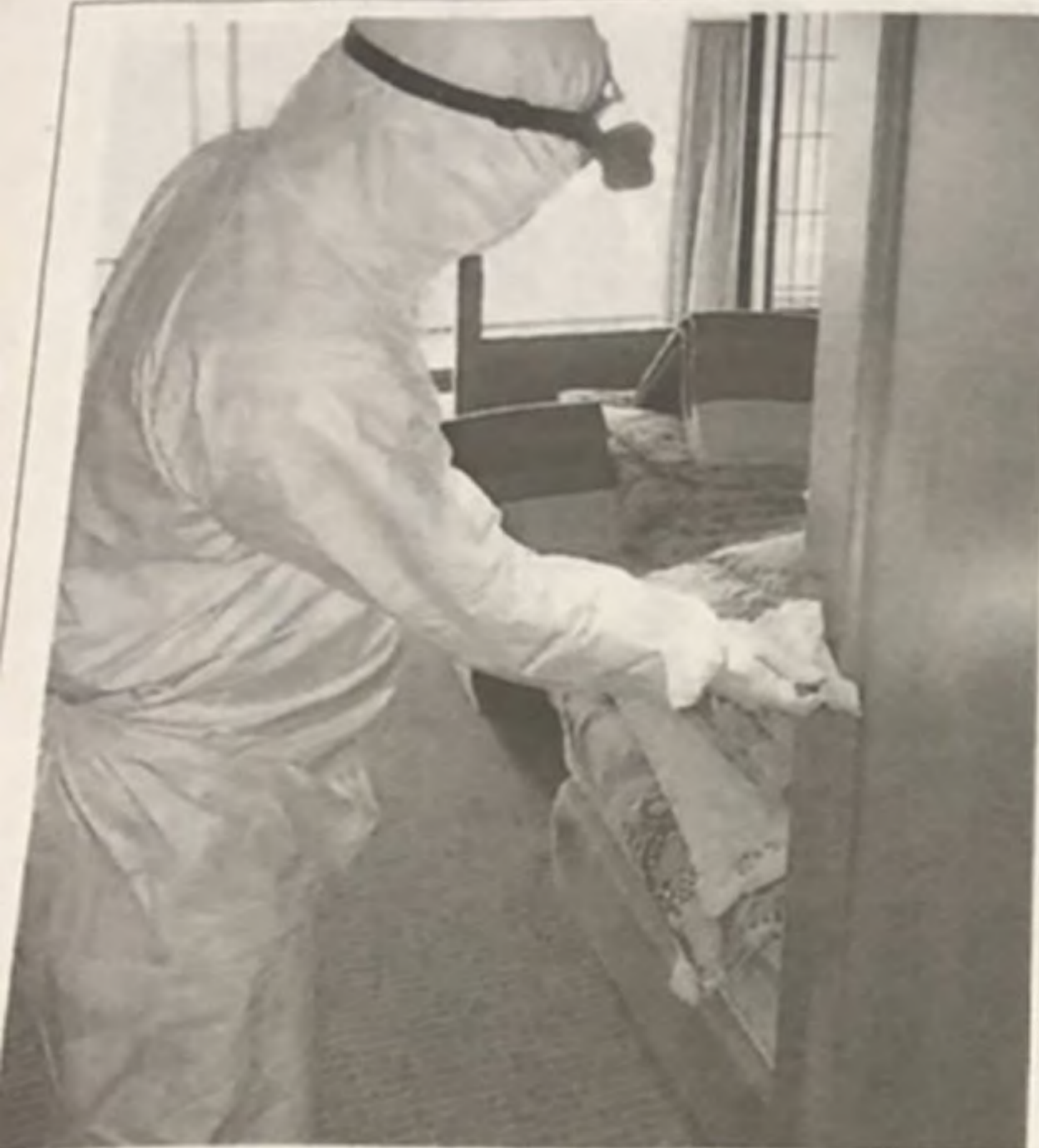
ウイルス相手に 消毒のプロが汗

新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、舞台裏で汗をかく「消毒のプロ」がいる。これまでは病気を媒介する害獣や害虫などの駆除がメインの仕事で、人間に感染する未知のウイルス相手は初めて。自らも感染する危険と向き合い、試行錯誤の日々が続く。

2月、中国・武漢市から帰国した百数十人を受け入れた県南部のホテル。ここの消毒作業にあたったのが県内の消毒業者29社で組織する「県ペストコントロール協会」（千葉市）だ。

協会の矢代秀明会長（47）によると、2月7日、内閣府からホテル消毒を要請された。人間に感染する見えないウイルス相手の作業に不安も募ったが、若手を中心に7社から15人が集まったという。

15人は防護服を着て2人一組で作



ドアノブなど、人が触りやすいところは真っ先に拭く＝2月、県南部のホテル、県ペストコントロール協会撮影

「衛生隊」結成 感染者はゼロ

業に当たった。薬剤では床や家具などが変色するため、アルコールに漬けた特殊な紙であらゆるものを拭いた。拭きとったウイルスが再び付着しないように、拭き方は同じ方向に。布団やカーペットには手動噴霧器を使った。

アルコールを使う作業は危険と隣り合わせだ。窓を開けていても蒸発したアルコールが室内に充満し、吸って体調が悪くなる人が出た。このため、作業は4分おきに20分間の休憩をとった。火の気があると危険なため、電源を落とし空調も止めた。暗い館内で、2月でも防護服の中は汗だくに。防護服を脱ぐ時は感染の可能性が高く、汗びっしりの顔などを触らないように、必ず介助役をつけたという。

同協会では、この15人を中心に「感染症予防衛生隊」を結成。その後、感染者が出た企業や福祉施設、学校など、消毒した施設は約40件のぼる。経験を重ねるうちにドアノブや手すりなど、人がよく触る場所が分かり、学校の給食室の食器も流れ作業で消毒するなど、効率化もできた。「絶対に顔を触らないなど対処法も分かってきた」と藤邑真一郎隊長（42）。隊員からは1人の感染者も出ていないという。